「実践事例集Vol.13」（2016年4月発行）で

紹介している事例を中心に抜粋しています。

（公益財団法人 ソニー教育財団）

ソニー幼児教育支援プログラム　幼児教育 保育実践事例サイト
http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/

実践事例集
http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/

研　究　主　題

科学する心を育てる

新たな気付きと豊かな感性を育む保育

社会福祉法人　長尾会

第２長尾保育園

はじめに

当保育園では、「個々の自立支援」「個々の自律支援」「共育ち支援」という理念に基づき、「正しい判断ができ、人間性豊かな子ども」・「自立心があり、創造性豊かで協調性のある子ども」「感性豊かに五感で感じる子ども」たちを育てるように保育目標をたて、取り組んでいる。

今年度は４年目の「科学する心」の取り組みとなり、一昨年は「五感を感じる」保育を大切に「発見・不思議・探求心からの気づき」から昨年は「6 つの気づき」（図 1）に着目した。さらに今年は、理念である、「感性を豊かに育む」に着目し、子どもたちが本来持っている感性を人、物、自然との関わりの中で感動や模索、探求を繰り返し、新たな気づきからその創造性、豊かな感性を育む保育を目標に取り組んでいる。（図 2）

「気づきノート」（図３）今年度は０歳～5 歳児全クラスが取り組んだ。日々子どもたちの気づきを写真に収め、感動体験をノートに書き出すことで保育者の意識にも変化が生まれ、月１回の職員会議では、体験談を発表し、職員全員で共有することに心がけている。結果、子どもの感性や気づきについてクラスの枠を超えて共有、認識できるようになった。また、日々の保育も可視化して保護者に発信し、子どもの育ちの理解を図っている。

H26 年度　取組み　図１「6 つの気付きのウェブ」

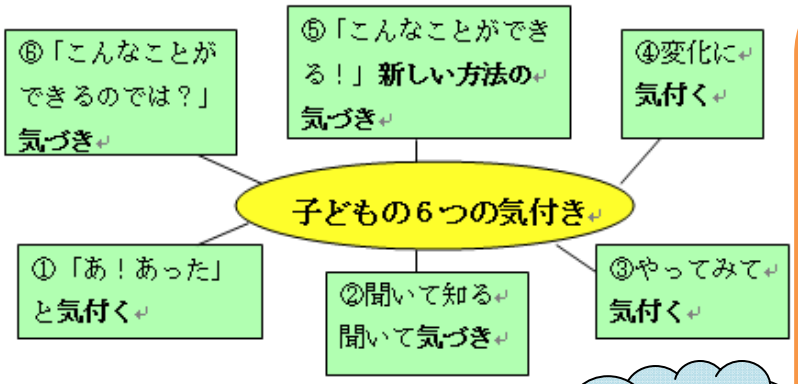
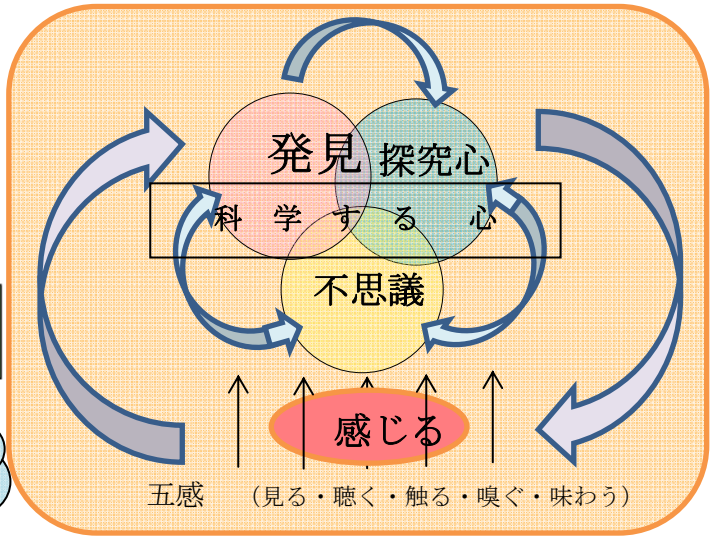
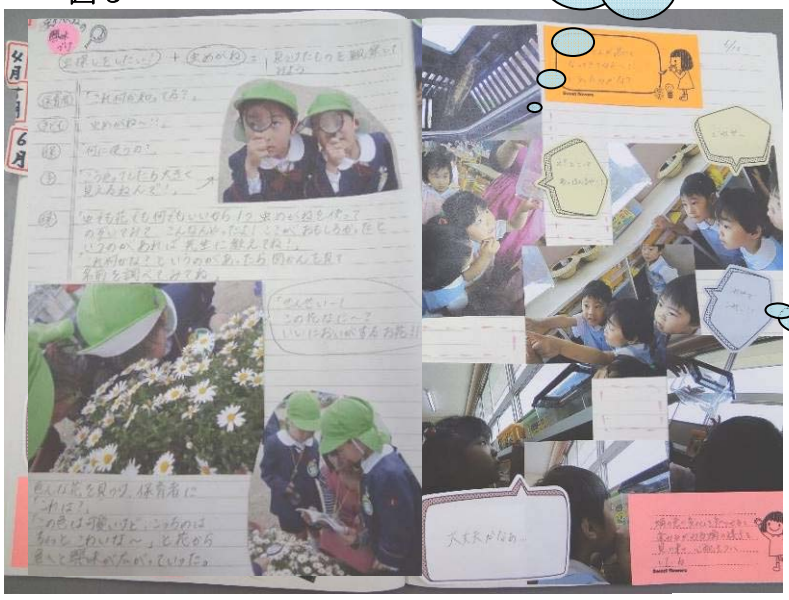


図２　科学する心の捉え方



５領域も踏まえて・・・

新たな取組み「気づきノート」
図 3



子どもたちのつぶやきを記入

保育者も保育を振り返ることができ、子どもの成長もよくわかる

3歳児＜身の回りの色々なこと全部楽しい！＞

３歳児は興味を持った物を集中して詳しく自分で調べたり、１つのことに集中して深めたりすることはまだ難しい。しかし、今色々なことに興味を持ち始め、心の中の畑に『興味の芽』がたくさん出始めている。「興味を持つこと」は「心情」「意欲」「態度」の実を大きく育てる為の出発点だと思われる。今回はその育ち始めている『興味の芽』を項目に分けていくつかピックアップしていきたい。

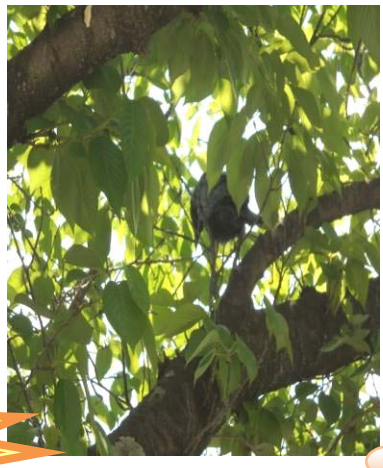
○生き物編○

＜だんごむしのお布団作ってん＞

だんごむしのお花のお布団やで
ねんねするかな？
まぁるくなれへん
眠たくないんかな？

花びらの布団を作り、
様子を見守る。

＜カラスの赤ちゃんみーつけた！＞



なんやあれ！？

カサカサ木の上で音がするので見上げて探すが、姿は見えず…立ったままの姿勢からは見えにくいので、見方を自分で工夫し、カラスのひなを発見・観察する。

えー…見えへん

こうやったら見えるかな？

徐々に下がっていく姿勢…

≪考察≫

生き物にはよく興味を持っており、興味の対象はだんごむしやアゲハ蝶等の小さな虫から、鳥やきりん等の大きな動物まで幅広い。その生き物のことを詳しく調べることはないが、その時その時の生き物の動きや形に興味を持ち、そのまなざしは本当に輝いている。その中で、だんごむしは丸くなると「眠っている」という考え方や、木の上をよく見たい時は姿勢を変えると「見えやすいかも」という発想力が育っていることを実感した。また、だんごむしに「眠っているから布団をかけてあげよう」と自分達がやってもらうことと重ねて遊びを展開させ、花びらを布団に見立てて寝かせようと想像力も育っていた。カラスのひなが木から落ちないように見守ったりする優しい姿も見られた。

〇不思議な穴編〇

＜木の穴見つけたけどなんかおるんかな？＞

暗くてよく見えないので

指でほじほじ…

この穴なんやろう？

なんかおる？

指は届かへん！

棒やったら届く？

なんか出てくるかな？

木に穴を見つけて何かいるかも！という期待を持って穴をのぞき、指を入れ、枝を使い、その次はもっと長い枝を使い…結局何も出てこなかったが、絶対に虫がいるはずだと信じて疑わなかった。

≪考察≫

不思議なものは何でも興味の的になる。穴の中には「何かいるはず」と考え、指で掻き出そうとするが、届かないので枝を使う。その枝でも届かないので、もっと長い枝を使って穴に入れて探っている。何も出てこなかったので、「なんで出てこうへんの？」「絶対虫が中におるはずや！」と信じていた。この事例からは、自分の指で届かないことが解って枝を使うが、その枝でも届かないと解り、もっと長い枝を使って中を探り、自分で考え道具を使い、模索する姿が見られた。そして他児と考えを共有し、「穴の中に何がいるのかな？」とドキドキも共有していた。

〇形編〇

＜なんでまぁるくなるん？＞

雨あがりの公園の溝に見付けた水溜りに小石を落として遊んでいた子どもたち。小石を水の中に落とすとことがおもしろいようで、何度も繰り返していた。そのうち、水紋がどうして丸の形に広がるのか疑問を抱いている言葉が聞こえてきた。
いつの間にかたくさんの子どもが集まり、そのおもしろさを共有している。

≪考察≫

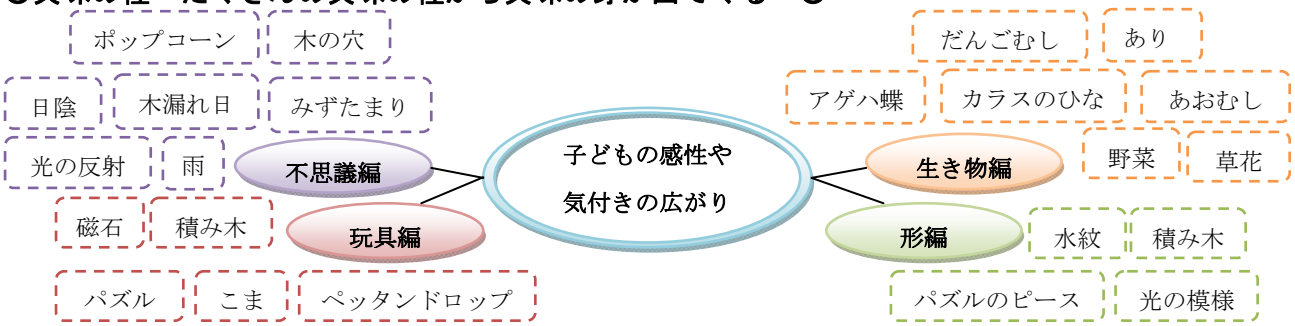
最初は水に小石を落とすことが楽しくて繰り返し、そのあそびの中で水紋の形に気が付き、そこに興味を持ち、おもしろさを感じている。「なんで？」と疑問を持って様々なものを見る力がついてきている。
また、他児とそのおもしろさを共有している。

〇積み木編〇

積み木であそぶ中で色々な発見、あそぶ方法を見つけていく子どもたち。友だち同士で相談する姿も見られる。積み木はどうしたら倒れないかを相談していたようで、壁を支えにすることを思いついたようだ。

積み木遊びを続けていく中で保育者が気付いたことは、毎回積み木を出す度にあそび方が似ているようで異なっているということ、そしてクラスの子どもたち全員がお互いのあそび方を見ながらあそんでおり、それを徐々に発展させていっている。
保育者があえて声を掛けずに見守っていると、自分たちで考えて工夫して遊んでいた。
積み木遊びを進めていく過程を通じて子どもたちは成長していることに気付いた。

〇興味の種 - たくさんの興味の種から興味の芽が出てくる - 〇



〇まとめ〇

毎日子どもたちと過ごす中で、３歳児は身の回りの事全てが楽しく、様々なことに興味を持ち始めていて保育者も「面白い」と感じる毎日である。興味の対象は生き物であったり、玩具であったり、身の回りの自然物であったり様々である。特に現在取り組んでいる積み木には目を見張るものがある。最初はただ積んでいるだけだったものを、「どうしたら倒れないか」「壁を支えにしてはどうか」「どれだけ高く積めるか」「自分より大きい・小さい」と毎回遊び方が展開されている。子どもたち自身が自分で考え、「面白い」と感じていることが伝わってきている。積み木はそういった子どもの発達を捉えやすい素材であることが解る。

集中して取り組むまなざしが見られ、『興味の芽』が育っていることが伝わってくる場面を捉えた「気付きノート」は８月までに２冊目に入っているが、今回はかなり激選している。保育園には興味の種がたくさんあり、「あ！あった」と気付くことで心が動かされ、その種に関わり始めることで興味の芽が徐々に膨らんでくる。その中で、心情や意欲の花や実が育ってきている。また、その成長の場にいる保育者の支援を「肥料」とするならば、さらに実は大きくなる。身の回りの色々なことが面白いと感じる感性を元に、「きっとこうやで」「やってみよう」と模索し、探求していく中で、新たな気付きが色々と生まれてくる。そして、「みつけたよ！」「できた！」と友だちと共有することで気付きや感性がさらに豊かに育つだろうと考える。そしてそのことを保育者が温かなまなざしで見守ることを通して、子どもたちは自尊感情が育っていくと思われる。子どもの発達を見極めながら、３歳児なりの気付き・発見を大切に見守り、４歳児に向けて興味の種から芽生えてきた子どもの気付きを６つの気付きのウェブの視点を使って、日々の保育環境を整え、育てていくことができるように支援していきたい。

４歳児<自分の知っている事と、違う事に気付く子ども達>

事例１　“ぜっこうちょうは違うかった”

～子どもの感性の出発点～

◇きっかけ

小さな虫の幼虫が部屋にやってきたのは５月の初旬。何の虫かは言わずに子ども達に見せると色々な意見が出てきた。

名前を決めようと皆で色々出し合った結果『ぜっこうちょう』に決まった。

かまきり？

てんとうむし？

あった！載ってるのと同じ！

他の園児が図鑑を持ってきて調べた結果「アゲハ蝶の幼虫だと分かった。

場面①　「ぜっこうちょうはみかんがすきやねんて！」

園のみかんの木にアゲハ蝶の幼虫がいたことや、図鑑で調べたことを子ども達と振り返りおうちが必要だとの声にさっそく部屋作りが始まった。

みかんが好きと知り、みかんが載っている広告を虫かごに敷いている子どもたち。調べていくうちにみかんの葉っぱを食べることを知る

あっ、みかん載ってた！好きってゆってたもん！

可愛いお部屋にしてあげよ！

場面②　「どうやって黒から緑に変身するの？」

「気持ち悪い色～」と観察していた子ども達がつぶやいた。
見てみると、あおむしの横に黒い物体を発見！！
「うんち？」という声があがっていた。
女児が「皮をむくねん！新しく変身するってお兄ちゃんが言ってた！」と聞き…
「かっこいい！変身やー！！」と盛り上がっていた。

場面③　「ぜっこうちょうじゃない！！」

５月の中旬、園庭でぜっこうちょうの餌を探していると、みかんの木にアゲハ蝶の幼虫を見つけ、飼うことになった。部屋に戻るなり「カゴ出してー！！」「うんちするから広告敷かないと！」と経験を活かし、もっとこうしたい！と自分たちで環境作りが始まった。
「黒いからまだまだ大人にならへんな！」「ぜっこうちょうと足の色が違う！」など違う所や同じ所を見つける事を楽しみ、友だちに教えてあげる姿もみられていた。
「足がいっぱいあるから、ストローに登れると思ったのに登られへんねんで！」
「こっちは緑色になるの遅いな」と見比べる姿が見られていた。
　年少の頃は虫に興味があり、よく触ったり捕まえたりして遊んでいた。

しかし、弱ったり死んでしまっても、命の大切さに結びつくまではいかなかった。
生き物に愛着を持って育てて欲しいという保育者の思いがあり、今回あおむしを育てることにした。
初めは興味を持つ子と持たない子がいたが、変化や面白い出来事に出会う度に心が動かされ
観察をする子も多くなり、少しの変化にもすぐに気付き保育者や他児に伝えるのが喜びになる程
愛情を持って世話をしている姿が見られた。また園庭であおむしを見つけては自分たちで蝶に
したいと言い育て始める場面も見られた。

脱皮をする事に、他のあおむしを育てる事で
気付いた子ども達。
「皮が消えた」と驚いていたが、自分達で調べて
調べて、あおむしが食べるんだと知った。

場面④　「ぜっこうちょうがちょうちょになったよ！ぜっこうちょうちょ！」

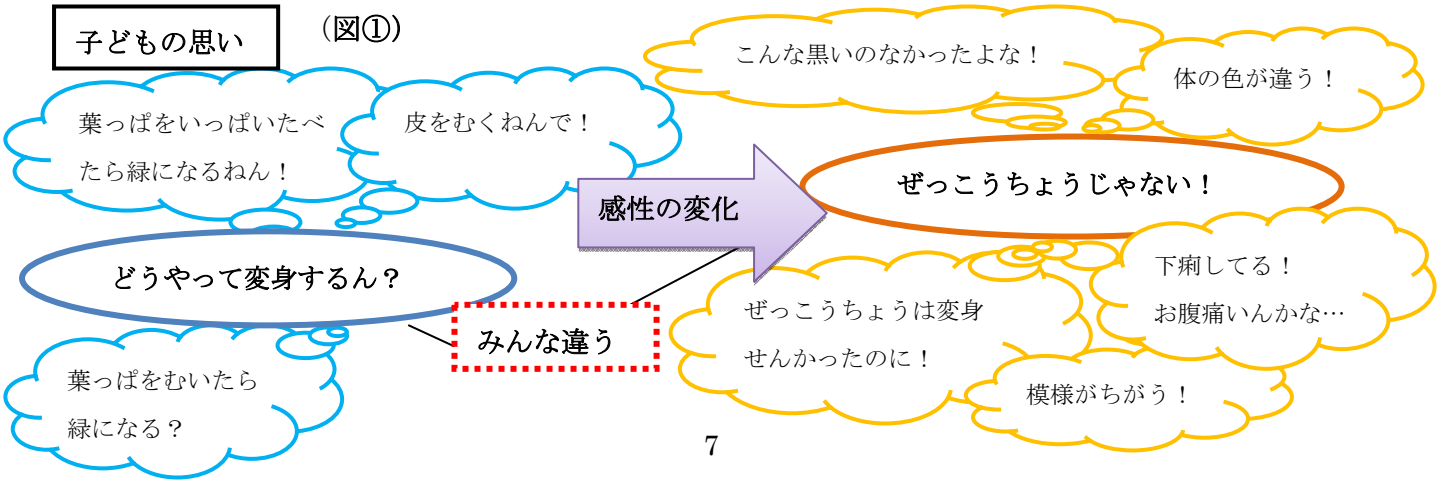
すごい！
よかったね！
ちょうちょになれて！

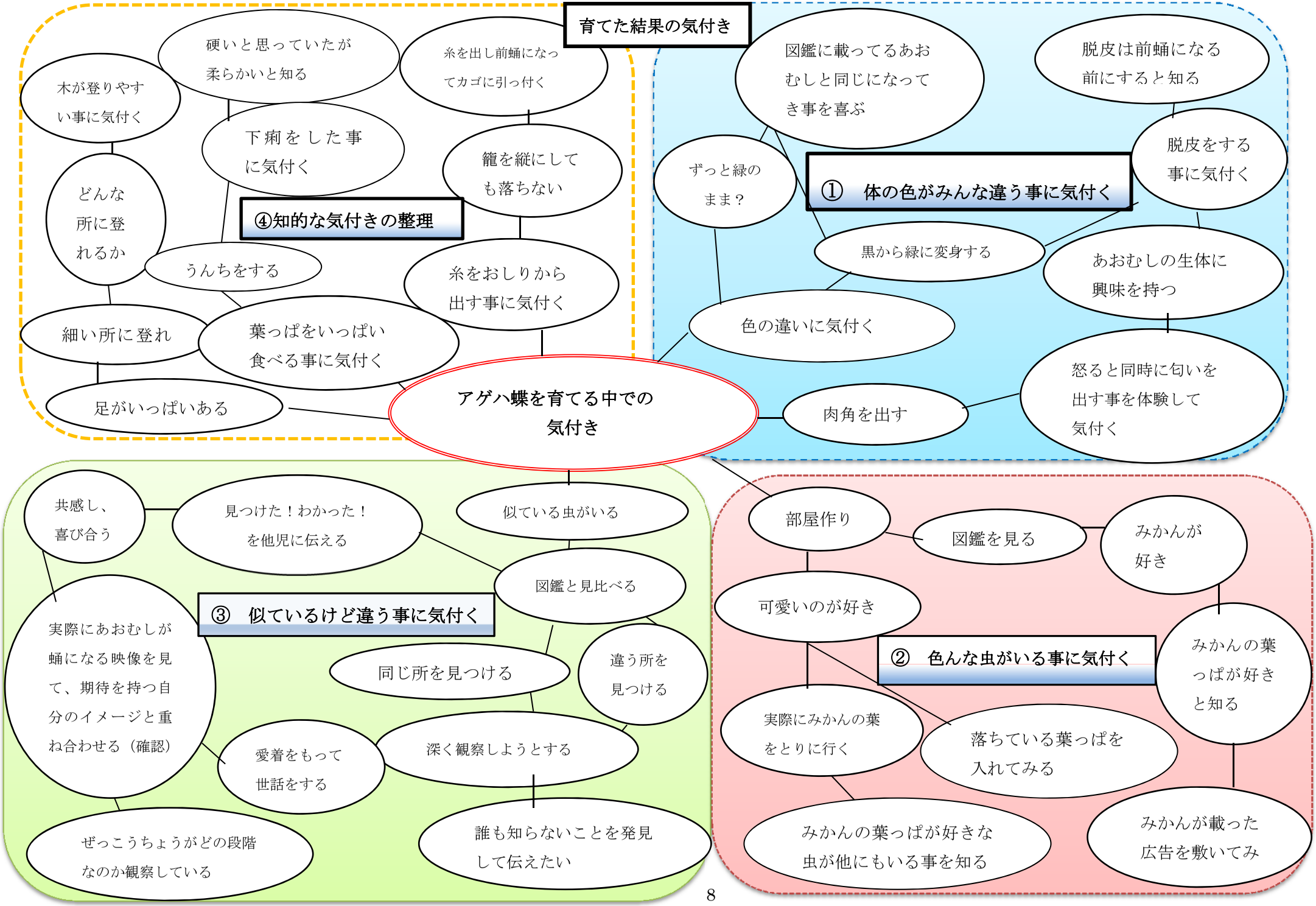
上手に飛べてる！

感動体験を共有する

◆考察◆
５月８日から２５日間ぜっこうちょうを育て、初めは図鑑を見たり聞いてきた情報を元に
飼育していたが、その中で疑問や不思議に感じる事に出会った。
子ども達は、「みかんの広告を敷いてあげたい」「部屋を可愛くしてあげたい」という事で世話が
始まったが、しばらくすると実際にみかんの葉っぱを取りに行く姿が見られた。
何匹かアゲハ蝶を育てる中で、「模様が違う」、「身体が緑に変わる速さが違う」
「大きさが違う」等、『違う』という言葉が子ども達から多くあがってきた。
アゲハ蝶を育てるにあたって、子ども達が自分たちの思いを行動にうつしたり試行錯誤しながら、
時には他児と協力し合う姿も見られ『皆で元気な蝶々に育てたい』という子どもの強い気持ちが感
じられた。『成長』『命』について考える体験となった。

子どもの思い　（図①）




育てた結果の気付き
硬いと思っていたが柔らかいと知る
糸を出し前蛹になってカゴに引っ付く
木が登りやすい事に気付く
下痢をした事に気付く
籠を縦にしても落ちない
どんな所に登れるか
④知的な気付きの整理
うんちをする
糸をおしりから出す事に気付く
細い所に登れ
葉っぱをいっぱい食べる事に気付く
足がいっぱいある
アゲハ蝶を育てる中での気付き
図鑑に載ってるあおむしと同じになってき事を喜ぶ
脱皮は前蛹になる前にすると知る
ずっと緑のまま？
脱皮をする事に気付く
① 体の色がみんな違う事に気付く
黒から緑に変身する
あおむしの生体に興味を持つ
色の違いに気付く
怒ると同時に匂いを出す事を体験して気付く
肉角を出す
共感し、喜び合う
見つけた！わかった！を他児に伝える
似ている虫がいる
図鑑と見比べる
③ 似ているけど違う事に気付く
実際にあおむしが蛹になる映像を見て、期待を持つ自分のイメージと重ね合わせる（確認）
同じ所を見つける
違う所を見つける
愛着をもって世話をする
深く観察しようとする
ぜっこうちょうがどの段階なのか観察している
誰も知らないことを発見して伝えたい
部屋作り
図鑑を見る
みかんが好き
可愛いのが好き
② 色んな虫がいる事に気付く
みかんの葉っぱが好きと知る
実際にみかんの葉をとりに行く
落ちている葉っぱを入れてみる
みかんの葉っぱが好きな虫が他にもいる事を知る
みかんが載った広告を敷いてみ

（ 中 略 ）

テーマ：ものすごくきれいな光をつくりたい

場面１　光を集めて　（５月下旬）

メダカを飼育している水槽の水面に反射した光がウッドテラスの天井に揺らめいていた。その反射光を見ていた子どもたちは「不思議」を感じ、保育室に用意していた「かがくあそび図鑑」を見て、「やってみたい」と鏡を使った活動が始まった。※鏡は割れないように表に保護フィルムを貼り使用している
また、裏側にもテープで固定しいる

光を集めるには―太陽と水が必要！
タライの中に水を用意し、太陽の光を鏡にうつし反射させる（かがくあそび図鑑を参考）

思った所に反射光を照らすことが難しい様子であった。しかし、力合わせて天井に光が映し出されると「見て！」と嬉しそうであった。

反射光を天井に作るが、うまくいかず、何度も挑戦する。何度も繰り返し、予想する光を作り出そうとする姿が見られた。

場面２　虹色を作ろう（６月１日）

光り遊びが載っている「かがく遊び」の図鑑に子ども達は興味を持ち読んでいた。
その中でも特に色んな色を集めようというページに興味を持ち、水を使ってあらわれる美しい色を「自分たちも作りたい」という声があがった。子ども達は「水と鏡がそろえば天井に美しい虹色が見る事が出来る」と予測し、図鑑を読んでいた。
桶の中に水を入れて鏡を使って虹色作りが始まった。
しかし、子どもたちの予想通りにいかず・・・反射しない原因をみんなで考え、反射が起こるように模索する。

水が汚れて
きたからか
な？

すると光が集まりはじめ、次第に子どもたちも反射のさせ方や、鏡の使い方に工夫が見られるようになった。

光が反射することを知って楽しい
↓
鏡を使って光を反射が楽しい。
↓
強く反射した光の瞬きは**きれい**

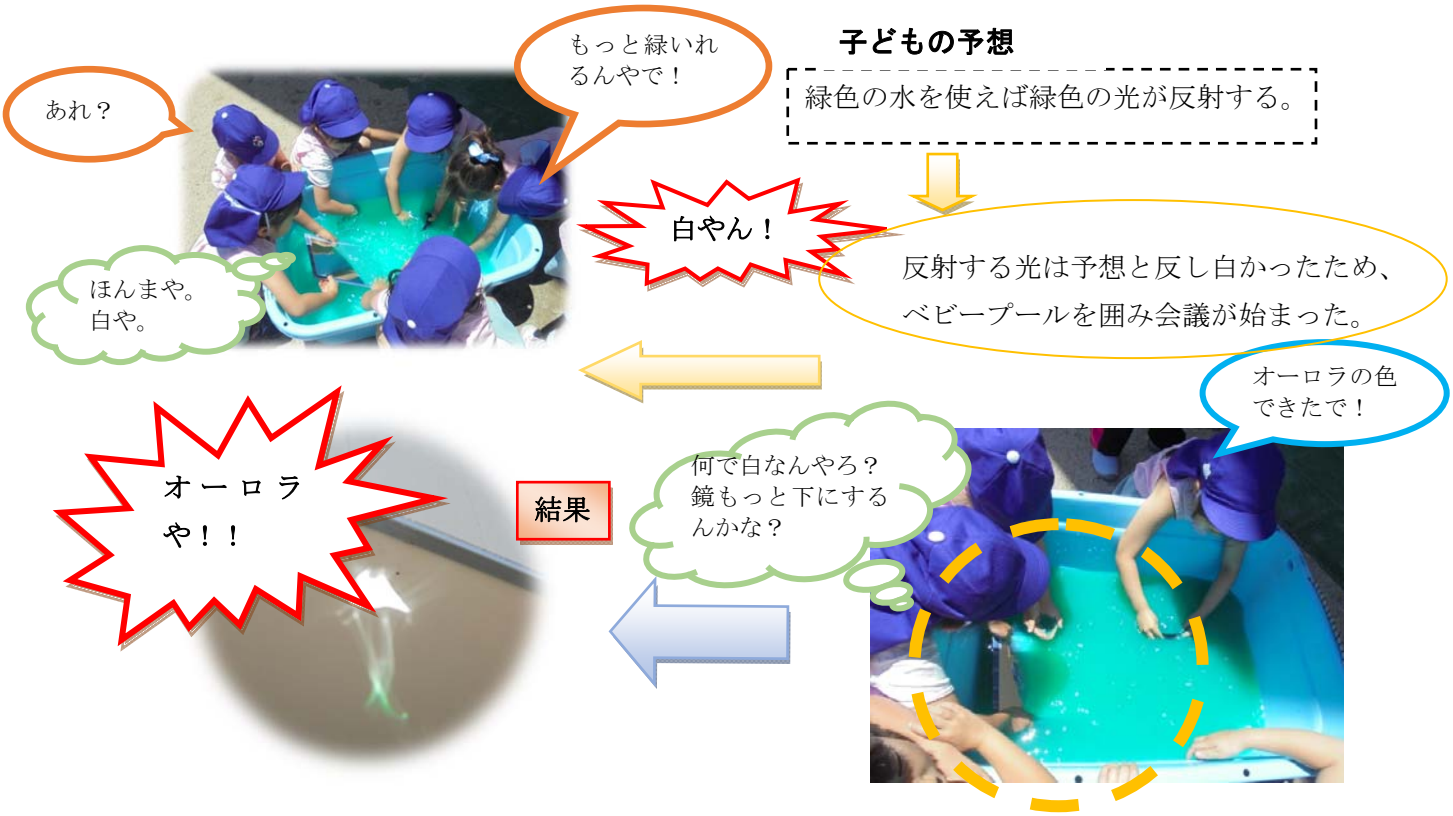
少しずつ太陽の日差しが強いタイミングで光を反射させるとよく光ることに気付き始める。

虹色作りでの気付き　（場面１、２を通して）

・水面を揺らさないようにゆっくりと鏡を動かして反射をさせると、白い光の反射ではなく虹色の光の反射になる。
（参加人数が少なくなったことで水面が揺れにくくなり発見した。）
・鏡の角度を変えると、反射した光の写り方が変わったり、消えたりする。

場面３　緑色のオーロラを作りたい（６月４日）

図鑑に乗っていた虹色と同じものが出来上がって喜んでいた子ども達に別の保育者が本物のオーロラの写真を見せてくれた。本物のオーロラは絶対で空中に漂っている。子どもたちからは、「オーロラきれいやな」「絶対のオーロラ作ったらきれいに見えるかも」と声があがった。そしてオーロラの緑色はどうやって作るか話し合い、色水を使う事にした。昨年度から植物の葉っぱや花など色々使って色水遊びを経験している子どもたちから「葉っぱがいいんちゃう」という意見が出た。しかし、水が多いので「葉っぱ」では色が濃くでないことを想定して、子どもたちに「絵具」を提案してみた。



子どもの予想に反し、白い反射光しか写らなかった。「なんでやろ？」と子ども達は、鏡の動かし方を工夫し試行錯誤を続けていた時、天井にうっすらと緑の反射光が見えた。「ほら出来た！」そして、緑色の反射光を再度、再現しようと何度も挑戦した結果、鏡の入れる深さによって緑のオーロラ作りに成功した。

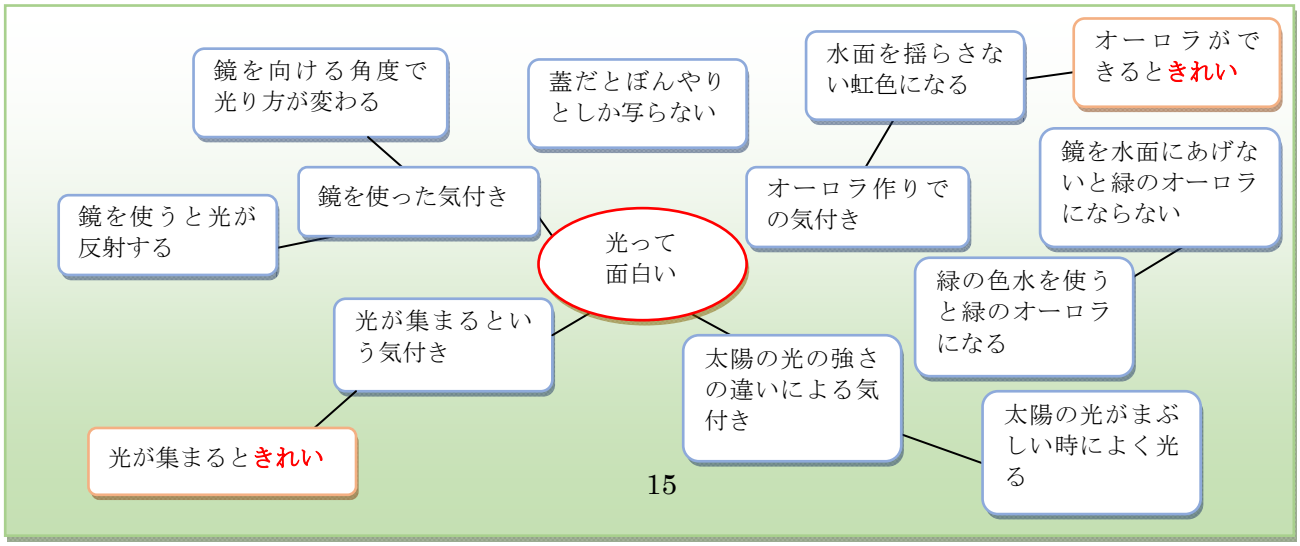
緑のオーロラ作りでの気付き

・水の色をオーロラと同じ緑色にすると緑のオーロラができる。
・鏡をゆっくりと水面ギリギリまで上げて、鏡の上に少し色水が乗るようにしないとできない。
・反射光が全部緑色にはできず、半分は白色になる。

まとめ１

鏡で光を反射させて遊ぶ中で、子ども達は「こうやってみたら？」と思いながら試していた。そして実際に起こった結果との違いに新たに試行を繰り返す姿が見られた。活動当初は反射するという事だけに楽しさを感じている姿が多く見られたが、次第に楽しさだけではなく、「どのようにすれば自分たちの思いやイメージしていることに近いことに到達することが出来るか」という追求を行う姿に出会うことができた。その追求の原動力にはより「きれい」な反射が見たいという意欲を感じた。

場面１～３までの鏡の反射遊びのＷＥＢ



場面４　鏡と鏡を合わしてみたら

光の反射を通じて、鏡への関心も高まった。複数の鏡を環境構成しても最初は一人ひとり反射を楽しんでいたが、鏡と鏡を合わせる新しい楽しさに出会っていく姿が見られた。

見て！
鏡に鏡いっぱい写ってる！！

わぁ！
きれい！

見て！
ここにもおる！

ここくっつけたらもっと見えるんちゃう？

合わせ鏡の空間作りを楽しみ、合わせるだけでなく万華鏡のような使い方に発展した。
同じ合わせ鏡でも、鏡の中の見え方が異なることに気付く

いっぱいあるみたいに見えるなぁ

ほんまやぁ
きれいー！！

鏡を回すことで見え方が変わるため、どのようなるかという予測を持って活動することができ、再現性もあるため、思考しながら活動する姿が見られる。

顔なんか違うなぁ

水がグルグル回ってるみたい

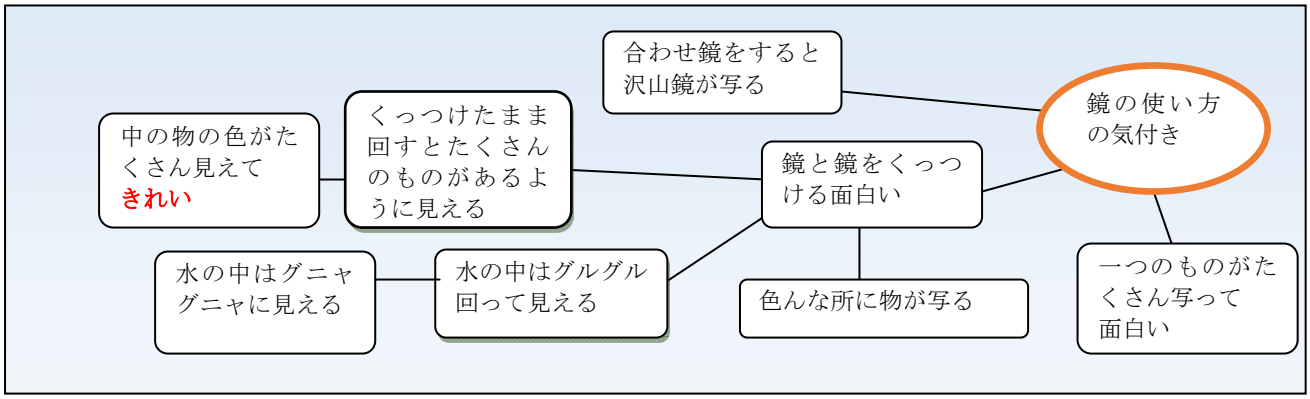
グニャグニャやぁ

鏡を固定したまま、そこを流動性のある水が動くため、再現性は低く、思考する姿は見られないが驚きや発見に集中する姿が多く見られる。

まとめ２

合わせ鏡の活動では子どもたちが経験した事のない活動が多く、こうなるであろうという予測を持ってからの行動ではなく、目の前で起こる事象に心が動き感動や驚きを素直に感じる姿が見られた。心の動きが原動力となり、こうすればどうなるだろうと鏡の特性に気付いていく姿が見られた。

場面４の　合わせ鏡のＷＥＢ



コラム

☆保育者の気付き「面白さが子どもによって違う」☆

同じ活動をしていても、子どもの関心の持ち方の違いや心の動かしたかの違いを見る事が出来た。

あそこにあるやつかな？

ピカピカしてる

早く早く！
鏡！

あっ！
ついた！

え？
あれ？

あっ！！
あったー！！

プール内には光がぼんやりとでも差し込んでおり常に反射が行なわれるため、ぼんやりと映ったまたたきを楽しんでいる。

日差しが強くなったときにのみ鏡をとり出し急いで強い光の反射を作る事できれいな瞬きを作る事を楽しんでいる。

保育者の気付きのまとめ

子ども達にも楽しみ方の違いが大きく見られた事例であるが、これはこれまでの鏡遊びの経験からきれいだと思う反射に数多く出会い、その中で子ども達が強い瞬きを作るにはどのようにしたらいいかを考えてきた結果である。また、強い瞬きが出来た時に意図的にこれを作った子ども、意図せず反射が行なえた子ども、友だちの作った強い瞬きの反射に心動かされた子どもなど大きく３段階の活動が同時に行なわれていた。これらは子どもの持つ面白いと思う感性の違いが大きく影響していると考えられ、子ども達の感性の違いを見る事が出来た。

考察

場面 1～3 では、かがく遊びの図鑑をきっかけに遊びたい、きれいな光を作りたいという感性が揺さぶられている。その中でこんなはずじゃない、どうしてうまくいかないのであろうという不思議さを感じ探求していき、子ども達なりの工夫や考えが繰り広げられていった。継続して取り組んでいくなかで「こんな風にしたらきれいになった」という発見が達成感となりきれいという感性の育ちに繋がったと考えられる。知的な気付きだけでなく、きれいと感じる感性が育った。また、鏡をうまく使おうと日光を上手に反射させるように何度も繰り返し挑戦していく姿も見られた。次の場面４の合わせ鏡の遊びでは、鏡を合わせたことによる映り方の不思議さ、面白さを目で見て感じることによって心の動く瞬間が多くうまれ、次々に思いが繋がっていき、子どもなりの彩り豊かな世界が広がっていった。その中で合わせる枚数や角度によってうつり方が違うという発見が沢山あった。鏡の使い方が違うと子どもたちの感性もまた異なっており、気付きや感性も違ってくる。どちらかの経験ではなく、鏡をたくさん使った経験をすることで個々の面白さを感じるポイントや心の動かし方の違い、探求する仕方も違っていることにも気付いた。今後も継続して気付きの育ちと感性の育ちの融合に着目し、「面白い」をたくさん子ども達と見つけていきたい。

各実践のまとめ

≪３歳児の事例のまとめ≫

生き物や玩具など全てのものが「面白い」と感じ、「なんでかな～？」と声に出して楽しんでいる様子が伺えた。どうすれば、思い通りになるか模索するなかで、「ダンゴムシはお花の布団でねんねするねん」や「丸くなる＝ねんね・眠たい」など、普段経験している事を重ねてより豊かな発想が沢山言動に現れた。積木の事例では、何度積んでも崩れ、子どもたちはどうすれば積めるか「きっとこうすれば～」と試していた。保育者は翌日マットを壁からずらし床のスペースを少し空けておいた。すると子どもたちは、「崩れない、なんで？」と次々に集まり積み始めた。「固い場所＝崩れない」と分かり、縦に積むだけでなく、壁に沿って横に広げ、「知恵」を使って実現させようとする力が感性豊かに育っていた。

≪４歳児の事例のまとめ≫

図鑑を見て「しってるで～」と教えてくれる子どもたちは、「きっと〇〇なるで～」と思っていたことが、飼育することで「違う」「なんで？」と気付きはじめ、気が付くと毎日夢中になって観察していた。すると、色や形、あおむしの事例では好きな食べ物やお腹を下すことまで知ることが出きた。実際に生き物や植物を育てることで、「なんで？」と図鑑には載っていない「不思議」を沢山発見することが出きた。今回の事例を振り返るとリアルな体験であり、子どもたちならではの感性豊かな言葉が沢山出てきた。そして、育てることを通して「面白い」だけでなく、「命の大切さ」や「仲間意識」もより深まった。保育室でさらに「野菜はな・・・」など学んだことを沢山友だちと共有し、廃材を使って絵を描くなど新たな感性を存分に協力しながら形にしていく姿が見られた。

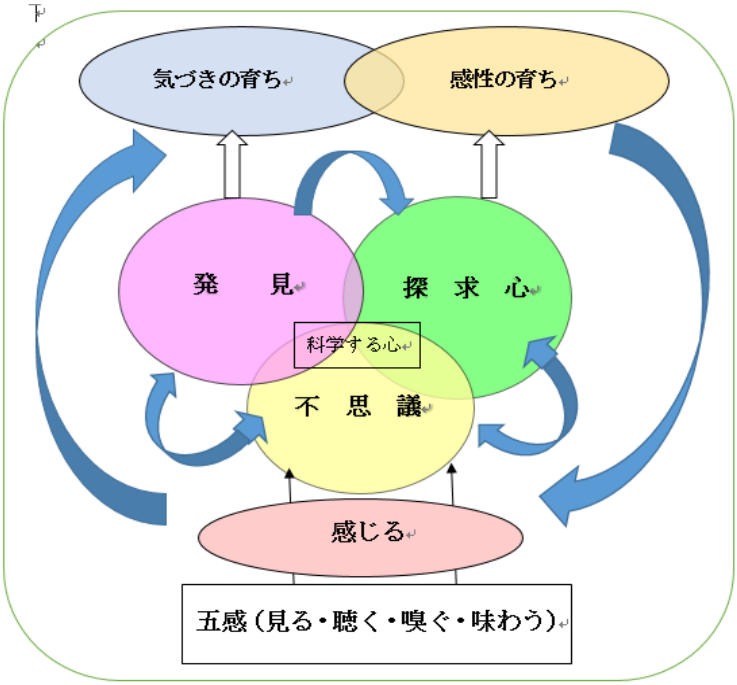
≪５歳児の事例のまとめ≫

メダカの飼育からキラキラする光を発見し、「なんで？」とかがく遊び図鑑で調べた子どもたち。
すると光を集めて虹を作るページを見た子どもたちは「やってみたい」と実際に実験してみた。しかし、なかなか水と影ではうまく光が作れず模索していた。また、鏡を使って太陽と影、水を使うことで光が浮かび上がることを知り、次第に「きれい」と新たな感性が生まれはじめた。鏡を合わせることで「不思議」「面白い」と感じ、また子どもひとりひとりの見方によって「きれい」が違って感じることがわかった。光を使った事例からひとりひとりの「きれい」をみんなで共有することで感性豊かな虹色ができた。

全体のまとめ

今年度は６つの気付きの出発点である「感じる」ことをそれぞれの年齢で捉えることを大切にした。
そして「不思議」「探求心」「発見」科学する心を子どもたちが発揮することを通してどの年齢も気づきの育ちだけでなく「感性の育ち」も捉えることができた。それを図式化したのが、次の図３である。

日々の保育環境（4 年間の取組み）図 3



今年度は 6 つの気付きをベースに保育を取り組む中で、「気付き」だけでなく子どもたちの言葉から面白い考え、発想が沢山出てきたことを実感することができた。そのことから、「気付き」だけでなく、子どもたちはもともと持った「感性」が発揮される場面に出会ったとき、新たな感性が育っているのではないかと考え、「気付きの育ち」と「感性の育ち」に着目した。

図 3 には新たに「感性の育ち」を融合させることで子どもたちの「もっとやってみたい」に繋がるのではないかと考えた。また、下記の図 4 では、「気付きの育ち」と「感性の育ち」を表にまとめたものである。

図 4	年号	気付きの育ち	感性の育ち
3 歳	H26	「あ！あった」の気づきからやってみて気づく・変化に気付く	≪身の回りの色々なことが全部楽しい≫ ・生き物―ダンゴムシ、カラスの赤ちゃん ・自然―川の音・流れ、木の穴 ・物―積木、ブロック、床、壁
	H27	「面白い」から「きっとこうやで」と「やってみよう」から気付く	
4 歳	H26	こんなこともできるので？の気付き	≪自分の知っている事と、違う事に気付く子ども≫ ・植物―野菜―色・形・土・水・匂い ・生き物―あおむし―模様・エサ・うんち・形
	H27	「こうやで」と思うことがやってみると「違う」に気付き、「なんで？」と疑問を持ち、より深く探求して気付く	
5 歳	H26	新しい方法の気付き	≪ものすごくきれいな光を作りたい≫ 鏡―太陽、影、水
	H27	自分の考えや予想を持って試して確かめ、気付いていく	

≪今後の課題と展望≫

現在各年齢とも（0 歳児～5 歳児クラスすべて）、毎日の子どもたちの様子を「写真」と「付箋」「吹き出し」などを活用して「気付きノート」に記録し続けている。本論文をまとめるために「気付きノート」を振り返ると、気付きがより広がったり、深まっていく様子であったり、感性が育ってきている様子が見られ、そのために保育者の気付きや環境構成を整える重要な役割を果たしていることが実感できた。今後、各年齢の「気づきノート」をもとに、一年間を通して「気づきの育ち」と「感性の育ち」を整理して、各年齢の発達を見通せるような資料づくりにも取り組みたい。

（ 後 略 ）